

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01335

研究課題名（和文）モチエとシカンを繋ぐ鍵ーワカ・ファチヨ遺跡の発掘：複合的社会の再建プロセスの研究

研究課題名（英文）Excavations of Huaca Facho during the transitional period from Moche to Lambayeque: A study of the reconstruction of complex society

研究代表者

松本 剛（Matsumoto, Go）

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：80788141

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：ペルー北海岸は、モチエやシカン、チムーなど、アンデス文明史における名だたる複合社会が盛衰を繰り返した地域である。モチエの衰退の後、シカンが隆盛を迎えるまでにはデータの空白期間（後850～950年）がある。本研究ではこのデータの空白を埋めるべく、ペルー北海岸北部において広域踏査を実施するとともに、この時期に存在した数少ない遺跡の一つであるワカ・ファチヨを発掘した。その結果、同時期に併存していたモチエやワリ、カハマルカなど、諸文化間の相互関係のなかで、それぞれの文化要素が融合し、新たな組み替えが行われたことにより、最終的にまったく新しい文化様式が生まれ、それがシカン文化となった可能性が見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、モチエからシカンへの移行期に焦点をあて、シカン発生の動的プロセスを明らかにすることを目指した。広域踏査と層位発掘によってデータの空白期間を埋めると同時に、ある複合的社会が衰退・崩壊した後、同一地域で再び社会的複雑さが増加し、新しい複合的社会が誕生するまでの動的プロセスを明らかにすることに努めた。これにより、我々がこれまで行ってきたシカンの最盛期から衰退期までの研究と地続きになり、北海岸北部の歴史を1000年以上にわたって長期的に見通すことが可能となった。これまで個別に語られてきた二つの複合的社会的発生から衰退までの一連のサイクルを結びつけて説明できる。

研究成果の概要（英文）：The Peruvian north coast is an area where famous complex societies in the history of Andean civilization, such as Moche, Sican, and Chimu, waxed and waned. After the decline of Moche, there is a data gap (AD 850-950) before the rise of Sican. In this study, aiming at filling this data gap, we conducted pedestrian surveys in the northern north coast of Peru as well as stratigraphic excavations at Huaca Facho, one of the few archaeological sites that existed during this period. As a result, it has become clear that in the mutual relationships among the contemporaneous societies such as Moche, Wari, and Cajamarca, syncretism occurred, in which the cultural elements of each culture were fused and/or reconfigured, eventually resulting in a completely new cultural style that later became Sican Culture.

研究分野：人類学

キーワード：シカン文化 モチエ文化 ワリ文化 カハマルカ文化 ワカ・ファチヨ ミドルホライズン 複合社会
文化的折衷

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とするのは、ミドルホライズン（紀元後 700～1000 年頃）と呼ばれ、中央アンデス地域の広い範囲がペルー南部高地に出現した政体ワリの影響下にあったとされる時期である。ワリが勢力を強めて領土を拡大していく中、紀元後 800～850 年頃、ペルー北海岸で 600 年以上続いた南部および北部モチェが終焉を迎える。さらに北海岸北部では、北部モチェ崩壊後の社会・政治的混沌の中からシカン（ランバイエケともいう）と呼ばれる新しい政体が勃興する。急激に成長したシカンは 950 年頃までに最盛期を迎えるが、モチェからシカンへの移行期は考古学データがきわめて乏しく、シカンの成長過程は依然として謎のままである。

ペルー北海岸の河谷平野は、中央アンデスの海岸地帯で最大の耕作可能面積を誇るとともに、年間を通して比較的安定した水量にも恵まれ、文明形成のための重要な経済的基盤を提供した [Kosok 1965; Wilson 1988]。モチェ、シカン、チムーといった、アンデス文明史における名だたる複合社会が盛衰を繰り返した地域である。とくに北海岸北部のモトゥペからサーニャまでの 5 つの河谷は高度に発達した灌漑用水路網によって互いに結ばれ、ランバイエケ複合と呼ばれる自然地理学的なユニットを形成していた。このランバイエケ複合に焦点をあて、本プロジェクトではこれまで継続してシカンの最盛期から衰退期までを対象に研究を行ってきた [Matsumoto 2009, 2014, 2017, in press]。本研究では、対象時期をミドルホライズンにあたる、モチェからシカンへの移行期へとシフトする。

モチェは、ペルー北海岸において南北 550 キロに及ぶ 14 の河谷を支配していたが、その領土はパイハン砂漠を境に南北に分断されていた。南北それぞれの地域で出土する土器は、同じモチェ様式と分類されるものの、型式に様々な違いが見られる。こうした背景から、モチェの社会・政治組織は一枚岩ではなく、美術様式や宗教イデオロギー、儀礼様式などを共有しつつも、自然地理学的な区分に沿って、少なくとも二つ（南部モチェと北部モチェ）に分断されていたと考えられている。さらにそれぞれの地域内においても、谷ごとに出土する土器の型式の種類や発生年代にばらつきがあることから、各地域において複数の政体が同時併存していたと考えられている。政治的分裂の傾向はとくに北部モチェで強い。北部モチェが支配した北海岸北部は自然地理学的な特徴にもとづいて、北から①ピウラ谷周辺、②ランバイエケ谷周辺（ランバイエケ複合）、③ヘケテペケ谷周辺とさらに細かく 3 つの地域に分割されるが、3 つの異なる政体が存在した可能性が高いといわれている [Castillo 2012]。

南北モチェの諸政体は、紀元後 650 年頃から衰退しはじめ、800～850 年までに完全に崩壊した。モチェの崩壊は、①壊滅的な気候変動（大旱魃と大洪水）による経済的な打撃や、②社会内部における政治危機、③ワリ帝国のような外部勢力による征服もしくは圧力など、様々な要因が引き起こしたものであると考えられている。研究者らはこれらに対する為政者らによる戦略的な対応とその結果を考古学データの中に見出し、議論してきた。その対応の一つが都市化である。大旱魃が水利権争いを引き起こし、下流域の居住地や従来の祭祀センターが放棄される一方で、上流域に人口が集中し、河谷の取水口近くに二つの大都市が出現した。南部モチェのガリンド（モチェ谷）と北部モチェのパンプグランド（ランバイエケ谷）である [Bawden 1996; Shimada 1994]。綿密にアクセスが制御された都市計画や高度に発達した余剰物資の大規模管理システムが、これらの都市では社会的分化が進んだことを示唆している。また、都市化と同時に伝統的な宗教信仰が捨て去られ、埋葬様式が仰向けの伸展葬から横向きの屈葬へと変化した。都市生活によるストレスが蓄積された結果、ガリンドでは 8 世紀中に、パンプグランドでは 9 世紀初頭に庶民による暴動が起き [Koons and Alex 2014]、都市全体が放棄された。この後、南北モチェの崩壊は急速に進んだ。

その後、パイハン砂漠以北ではシカンが突如として最盛期を迎えるが、それまでの 100 年間は考古学データの空白期間と言っても過言ではない。これまでに見つかっているのは、わずか 7 つの遺跡で出土した少量の土器と埋葬跡、壁画のみである。踏査でもこの時期の土器が見つかることはほとんどなく、この地域を断片的に調査したセトルメントパターン研究 [Tschauner 2001; Hayashida 2006 など] でも空白期間となっていた。見つかっている 7 遺跡の分布には偏りがある。5 つがランバイエケ複合内に集中しており、さらにそれらのうち、長期的な建築シークエンスを持つ遺跡はすべてラ・レチェ川中～下流域に集中している。残りの 2 遺跡はヘケテペケ谷周辺で見つかったものだが、移行期の居住痕跡は規模が小さい。また、ピウラ谷周辺では移行期の遺跡がまったく見つからず [Montenegro 2010]、モチェ政体の存在についても懐疑的な見解を示す研究者は少ない [Kaulicke 1992; Shimada 1990]。

2. 研究の目的

本研究では、モチェからシカンへの移行期に焦点を当て、シカン発生の動的プロセスを明らかにすることを目指した。広域踏査と層位発掘によって新しいデータを提供し、データの空白期間（紀元後 850～950 年）を埋めると同時に、ある複合的社会 (complex society) が衰退・崩壊した後に、同一地域で再び社会的複雑さ (social complexity) が増加し、新しい複合的社会が誕生するまでの動的プロセスを明らかにすることを研究目的とした。これにより、我々がこれまで行ってきたシカンの最盛期から衰退期までの研究と地続きになり、北海岸北部の歴史を 1000 年以上にわたって長期的に見通すことが可能となる。これまで個別に語られてきた二つの複合的社会の〈発生から衰退まで〉の一連のサイクルを結びつけて説明できる理論を構築したい。

1980 年代、Service が提唱した社会進化モデル（バンド→部族→首長制→国家）やプロセス考古学への批判が起こり、考古学者たちは「社会は直線的に発展し続ける」というネオ進化論的仮定と決別することになった。「複合的社会には浮き沈みがつきものであり、社会政治的な複雑さは増減を繰り返す」という気付きは、「社会は、都市化や中央集権化の期間と、地方分権や地方自治のインターバルの間を振り子のように振れる」

という循環モデルの登場を促した [Yoffee 1979]。その結果、80年代末からの20年間には複合的社会の崩壊がきわめて重要な研究テーマとなり [Yoffee and Cowgill 1988; Tainter 1988; Webster 2002 など]、Gibbon, Spengler, Toynbeeら歴史学者が文明の盛衰史を紡いだように、考古学においてもようやく社会の成立から衰退までが一連のプロセスとして扱われるようになった。さらに、Yoffee and Cowgill [1988] や Marcus [1998] は早くから、社会の衰退や崩壊は一時の出来事としてではなく、復興や拡大につながる動的なプロセスの一フェーズとして認識すべきであると指摘していた。こうした背景のもと、近年では、崩壊の後で複合的社会がいかんして再建されるのかという問題への取り組みが顕著になっている [Schwartz et al. 2006]。

こうした潮流に比して、アンデス文明研究では復興期を含めた社会・生態系プロセスに対する関心は低く、モチエやシカン研究においても、近年まで研究者の関心は最盛期から衰退期に集中していた。また、従来の研究では衰退期の変化プロセスを説明する際に環境因子を過度に強調した決定論的な議論が目立ち、近年盛んに議論されている社会・生態系システムの弾力性や回復力といった概念 [Gunderson and Holling 2002; Redman 2005; Folke 2006] は完全に欠如していた。本研究では、環境因子を過大評価せず、既存の社会文化システムの変化を詳細に追うことによって、分裂・分解の期間を経て、社会的な複雑さが再び増していく過程を明らかにする。一度崩壊を経験した地域において、「二世代目の社会」はいかんして再建されるのか。再建された社会は、先立つ社会とどのような点において類似する／異なるのだろうか。成立から崩壊までのサイクルの連続を長期的に見通すことにより、本研究は複合的社会的動的プロセスに関して新しい説明モデルを提供できる可能性を秘めている。

3. 研究の方法

「研究開始当初の背景」において述べたように、これまでに確認されている、モチエからシカンへの移行期の主要遺跡がランバイエケ複合に集中することを踏まえると、モチエ崩壊後の社会政治的混乱の中からシカンがいかんして興ったかを明らかにするには、ランバイエケ複合に焦点を当てるのが最適であると考えられた。したがって、本研究ではランバイエケ複合にて広域の踏査を行うとともに、上述のラ・レチュエ川流域の5遺跡の一つ、ワカ・ファチョ遺跡にて発掘調査を行うことを目標とした。なお、ワカ・ファチョを選んだ理由は、①シカンの最初の首都であるシカン遺跡との近さ、②居住期間の長さ、③モチエ期後の美術様式の存在（モチエとワリの融合？）の3点である。

ワカ・ファチョは、ラ・レチュエ川中流域のポマ森林歴史保護区内に位置する、高さ6メートルほどの小基壇を中心とする遺跡である。遺跡の周囲半径1キロ以内には、ワカ・マヤンガやワカ・トルドをはじめとする最低5つの基壇や墓地遺跡が確認されており、これらが一つの複合体を形成していた可能性が高い。この複合体はその南限において、我々がこれまで調査してきたワカ・アリーナを北限とするシカン遺跡と隣接していたことになる。これまでワカ・ファチョが本格的な調査の対象となったことはなく、米国自然史博物館の James Ford が残した手記の一部を Donnan [1972] がまとめたものが、唯一出版されている考古学データである。Donnanによれば、主要基壇に空けられた盗掘坑の断面から、継続的な居住を示唆する7面の床と、少なくとも5回の増築跡が確認できたという。また、基壇の周囲ではアンデス文明形成期中期（紀元前1200～800年）以降の様々な様式の土器片が見つかっており、長い居住史の復元が期待できる。これらの土器片には、モチエとワリの土器様式を融合したようなものも含まれるという。

モチエ崩壊からシカン勃興までは、ミドルホライズン（紀元後700～1000年頃）と呼ばれ、中央アンデス地域の広い範囲が南部高地に出現した“ワリ帝国”の影響下にあったとされる時期に当たる。ワリが帝国であったか否かについては異論があるものの、この時期に広い範囲で地域間交流が活発になったという点については多くの研究者が同意している。中央アンデス各地において、ワリがローカルな政体とどのような関係にあったかを明らかにすることは、ミドルホライズン期の主要な研究課題の一つである。近年では Castillo [2012] をはじめする研究者たちが、モチエの衰退にワリが深く関与していた可能性について言及し始めている

[Bracamonte 2011; Curo y Rosas 2014]。ワリの影響はワカ・ファチョにおいても顕著で、最後の増築期に作られた壁に描かれていた多彩色の壁画は、モチエ美術の主要モチーフをワリ美術の構成で描いていることから、二つの美術様式を融合したものと解釈されている。また、もしこの壁画がワリのそれと全く同じ構成を持つのであれば、すでに盗掘によって失われている壁の中央上部には杖を両手に持ったワリ宗教の主神像が描かれていたはずである、という Donnan [1972] の指摘は大変興味深い。事実、シカンの宗教美術で描かれる一神教的な神の立像は、ワリの主神像と同様に、正面を向いて両手に杖を持っている。

ヘケテベケ谷下流域のセロ・チェベン遺跡では、モチエの衰退期に高地の人々が移り住んできた事例が報告されているが [Rosas 2010]、ワリ自体が北海岸北部に侵入してきたことを示すデータはまだ存在しない。一方、同地域サン・ホセ・デ・モロ遺跡を調査している Castillo [2012] は、シカンへの移行期にワリ様式土器とともに、北部高地のカハマルカ様式土器の出土が急激に増加することを踏まえ、ワリが北海岸への侵入を試みる際にカハマルカが仲介役を務めた可能性を指摘している。このように、シカン成立期の理解には、周辺文化、とくにワリやカハマルカとの関係は大きな手がかりになるだろう。

4. 研究成果

(1) 広域踏査

本研究は当初、3回の広域踏査（2019～2021年度）と2度の発掘調査（2022～2023年度）を実施する予定でスタートしたが、新型コロナウイルスの蔓延にともない、海外での調査活動が大幅に制限を受けることとなり、予定していた3度の広域踏査のうち2度は中止せざるをえなかった。結果として、集中的に踏査を実施で

きたのはサーニャ谷下流域およびラ・レチェ谷中流域のみであったが、後者は並行して行われた LiDAR 測量と合わせて、いくつかの重要な発見をもたらした。

まず、シカン遺跡がこれまで想定されてきた範囲を大きく越え、ポマ森林歴史保護区内に点在する大小様々な遺跡群を含む、15 平方キロを超える大きな遺跡であったことが明らかになった。これまで、我々を含むほとんどの研究者は、シカン期の埋葬や儀礼に関心をもち、おもに大広場とその周囲を取り囲む祭祀基壇群（バタングランデグループ）に焦点を当ててきたため、遺跡の範囲は明確に定義されてこなかった。研究者のなかにはこの祭祀エリアのみを考慮して、シカン遺跡を「祭礼の際にのみ巡礼者が訪れる、普段はほとんど人がいない巡礼センター」と定義した者もいた [Silverman 1994]。ところが今回新しく得られたデータは、この遺跡がさらに四方に広がっていることを明らかにした。それは都市を思わせる景観であり、近年 Cervantes [2020] が発表した「シカン・シティ」の概念に近いものである。

第二に、このシカン・シティの空間構成の詳細が明らかになった。たとえばシティの北側には（低層であるものの）巨大な基壇（ファチョ＝マヤンガ複合やワカ・ソンティエヨ、ワカ・アレーナなど）が立ち並び、それらの基壇間の広い空間には、低い畔のような盛り上がりによって格子状に区画された農地のようなものが広がっていた。この盛り上がりは地表から 5～15 センチほどの高さであり、区画の一边は平均して約 30 メートルほどであった。盛り上がりの低さや、支柱跡がないことを考慮すると、建物であった可能性はきわめて低い。また、これらの区画を仕切る“畔”は二重になっているところもあり、水路のように見える。ワカ・ソンティエヨの東側でこの“水路”を試掘したところ、高さ 20 センチの二本の盛り上がりによって挟まれた内部では水の流れによって堆積した薄い粘土層が幾重にも確認され、確かに水路であったことを示唆している。ラ・レチェ川や、その支流であるパコーラ川から水を供給していたようだ。盛り上がりの一部は途切れており、区画内への取水口と思われる部分もある。こうした水路網が区画全体を網羅し、一大農地を形成していたと考えられる。これまで、シカン遺跡はなぜ大雨のたびに氾濫を繰り返す川に隣接する形で建設されたのかはよく分かっていなかったが、農業によってシティの人口を支えるためであったと考えれば、腑に落ちる。また、“農地”内には無数の低く小さな基壇が点在している。耕作者たちの住居であったかもしれない。試掘では、上述の区画が実際に農地であったことを検証するべく、いくつかのサンプルを採取した。将来的に土壌や生物遺存体の分析を実施する。

第三に、シカン・シティの北部では自然災害の痕跡が確認された。川は農業を支える重要な水源であった一方、水害という形で危険ももたらした。LiDAR 測量により、ラ・レチェ川の旧河道が明確に確認され、これまでに何度も氾濫していたことが明らかになった。こうした氾濫によって、ワカ・アレーナをはじめとする基壇（の一部）が破壊されていることもわかった。歴史時代においても、ラ・レチェ川のほとりに建設されたシカン遺跡の祭祀基壇群（バタングランデグループ）は、幾度となく水害に見舞われてきたことが知られている。その一つであるワカ・アベヘロ（大広場の南西角）は 1925 年の大洪水の際に流されてしまい、すでに現存しない。我々のこれまでの調査により、ワカ・アレーナでは形成期後期から居住が始まっていたことが分かっているが、具体的にいつ水害が起こったのかを特定することは困難である。ただし、破壊された部分の建設時期が分かれば、それより後であることは間違いない。これについては今後の調査で明らかにしたい。

第四は、ワカ・ファチョの再発見である。Donnan [1972] が報告しているワカ・ファチョの場所には重大なミスがあり、報告書の記述どおりに探しても見つからなかった。これまで 50 年以上にもわたって、考古学者は誰も特定できない状態にあった。本研究の申請前に、この遺跡の位置についてポマ森林歴史保護区を管理する SERNANP に相談したところ、守衛たちはある基壇へと案内してくれた。この基壇はポマ森林歴史保護区の北限近くに位置し、ワカ・マヤンガと考えられる低層基壇に隣接している。ところが、きわめて歪な形をしており、大規模な盗掘による被害が著しい。さらに、Donnan [1972] に図版が掲載されている基壇とは、サイズも形状も建築軸もまったく異なるものであった。我々の踏査と詳細な測量の結果、本物のワカ・ファチョはそこからさらに北東 800 メートルのところまで再発見された。ワカ・マヤンガと合わせて、ファチョ＝マヤンガ複合と呼ぶこととした。

（2） 発掘調査

2022 年度には SERNANP が考える“ワカ・ファチョ”（以下、偽ファチョ）と、2023 年度には踏査と測量の結果明らかになった本物のワカ・ファチョの二つを発掘した。

前者は、基壇の元の形状が分からなくなるほどに盗掘被害が凄まじい。発掘は、被害を免れていた東側麓に 5 x 5 メートルのトレンチを設けて実施した（のちに 10 x 7.5 メートルへと拡張）。約 1.5 メートル掘り下げるなかで、3 つの居住面を記録した。埋土は多くの灰や焼土を含み、それぞれの居住面でも火を使った活動の痕跡が見つかった。しかし、時期を示す遺物がほとんど出土しなかったため、現時点では時期同定は難しい。サンプリングした生物遺存体（炭化した木片など）を使って、今後、放射性炭素年代測定を実施する必要がある。唯一、時期を示す遺物が、居住面 3 の下の埋土から出土した、白い石製スプーンであった。「手首を縄で後ろ手に縛られ、裸で跪く人物」を模った装飾がついたものである。石製スプーンといえばワリだが、明らかにモチェ文化の影響を受けている。ちなみにモチェ文化にはこのような石製スプーンの出土例はない。スプーンが見つかった層 5 は、ミドルホライズン期以降の堆積層である可能性がある。

2023 年度の調査では、ようやく Ford が発見・調査したワカ・ファチョを発掘することができた。ワカ・ファチョは、現在の地表面では、3～4 メートルの高さをもつ楕円形の盛り上がりには見えませんが、Donnan [1972] の報告によれば、約 6 メートルの高さをもつ基壇のはずである。ところが、偽ファチョほどではないにせよ、同様に盗掘被害が激しい。現在も Ford が発掘し、多彩色の壁画を発見した U 字型トレンチの輪郭が確認できるが、とくにこの U 字型トレンチの中央部や、基壇の南側麓あたりの被害が著しく、いくつもの盗掘坑

が開いたままである。盗掘を免れた基壇の南西角と北東角付近にそれぞれ発掘区（5 x 5メートル）を設け、前者を発掘区1、後者を発掘区2とした。Fordが発見した壁画が見つかったのは、南側に開いたU字型に配置された壁の内側であるが、発掘区1はこの壁画が面していたと考えられる中庭の南西角を狙って設置した。一方、発掘区2は同基壇の北東角あたりを狙って設置した。

発掘区1では、地山に到達するまでに（Fordによる発掘と同様に）7つの居住面が記録された。埋土からはチムーからシカン、モチエ、形成期まで、多様な土器片が出土し、継続的な居住を示すものと考えられる。ただし、遺物の攪乱もあり、層ごとの明確な時期同定は困難である。これは日干しレンガに関しても同様で、方形および円錐形のもの混在する形で出土した層があった。とはいえ、上から4つめの床面は、壁画と関連していた基壇中庭の床と考えられる。この面を覆っていた砂層には、細線画（豆模様）が描かれたモチエ期の鎧型土器の欠片とともに、シカン期の粗製土器の欠片が含まれており、モチエからシカンへの移行期にあたり、Fordの壁画とも時期的に一致する。また、この中庭の床の下からは一連の日干しレンガで区切られた3つの小さな部屋構造が見つかった。ここで出土した日干しレンガはいずれもサイズが小さく、モチエ期のものと思われる（一辺が最長でも34センチ）。なお、部屋構造のなかでは灰の集積などが見つかったが、どのような活動が行われたかは不明である。

発掘区2では、目論見どおり、基壇の東側面が明らかになった。基壇は少なくとも二段階構造になっており、それぞれの段の側壁が内側に傾斜していることから、基壇全体は台形ピラミッドの形をもっていたと考えられる。この台形ピラミッドの南側に中庭があり、基壇一段目の側壁がそのまま南に突き出す形で延長し、（壁画が描かれた）U字型の壁の両ウイングとなっていたのであろうと推測される。下段の側壁外側の攪乱層のなかで、細線画が描かれたモチエ期の鎧型土器の欠片が見つかったが、模様（蛇や棍棒）がとても細かく、モチエ後期のものと思われる。また同じ層からカハマルカ様式のスプーンも見つかった。側壁の内側からは時期同定に使えそうな遺物はほとんど出土していないが、一点のみ、豆を描いた多彩色の線画の土器片が見つかった。これもモチエ後期のものと思われる。

ワカ・ファチョは、ファチョ＝マヤンガ複合の一部であり、ワカ・マヤンガの低層基壇の上に建てられている。この地域の祭祀基壇に多い、複数段からなる基壇構造や、宗教的なモチーフを描いた壁画で飾られた中庭を備えていることから、祭祀の場として機能したことが推測される。ワカ・ファチョの発掘によって明らかになったのは、ファチョ＝マヤンガ複合が形成期に建てられて以来、チムー期に至るまで長期にわたって使用されたということだけでなく、モチエ後期からシカン期への移行期に重要な役割を果たしていたことである。さらに、この場所でどのような祭祀が行われていたかを明らかにすることによって、移行期を通じてシカンがどのように興ったかの手がかりが得られるかもしれない。

では現時点で、北部モチエからシカンへの移行はどのように説明できるだろうか。これまでの遺伝学的な調査によって、モチエ人とシカン人の遺伝的な差異が明らかになっており、移行期のどこかで新しい集団の流入があったことは間違いない〔篠田 2009〕。したがって、単に北部モチエが復興したというシナリオでは説明できない。2022年度の発掘で出土した石製スプーンにワリ様式とモチエ様式の折衷が見られるように、ミドルホライズン期にペルー北海岸（とくに北部）やその隣接地域において併存していた諸文化、つまりモチエやワリ、カハマルカなどの相互関係のなかで互いの文化要素が融合したり、新たな組み替えが行われ、最終的にまったく新しい文化様式が生まれ、それがシカン文化となった可能性が強まってきた。これを担ったのが、モチエ人とは遺伝的に異なる新しい集団（シカン人）である。そしてこの説明は、これまでに我々が実施した発掘調査での諸発見とも矛盾しない。

たとえば、シカン遺跡中心部の大広場で実施した発掘では、大規模な饗宴跡の残滓や灰土のなかからカハマルカの浅鉢を模した彩色土器が多数出土している〔Matsumoto 2014〕。カハマルカの浅鉢とは、カオリナイトを含む粘土（カオリン）で作られたクリーム地の皿のおもに内壁面に褐色系の緻密な彩文を施したものである。大広場出土の彩色土器は単にこれを模倣したものではなく、クリーム地に褐色系の彩文を施すという点で類似を見せつつも、カハマルカのようにカオリンではなく在地の粘土を使い、彩色の際に使われる顔料の色のバリエーションやデザインも大きく異なる。また、大広場の発掘においては、ピウラ地方を発祥とするパレテアダと呼ばれる、おもに調理や貯蔵などの用途で使われる鍋や甕型の土器も多数出土している〔Matsumoto 2014〕。文様が刻まれたパドル（櫂）によって成形される際に、この文様が土器の外壁面に刻印されるというものである。パレテアダ土器は、ピウラ地方において紀元後7世紀にはじめて出現して以来、北海岸の広い範囲で今日まで作り続けられており、これまで考古学的・歴史学的に記録されてきた〔Cleland and Shimada 1998; Day 1971; Lanning 1963; Lara 2021〕。シカンはこの外来の土器様式を取り込み、在地のモチーフをパドルに刻んだ。彼らが日常生活においても、祭祀においても、文脈の区別なく使用したことが、この特殊な様式が北海岸の広範囲に広がる契機となった。

このようにシカンは、先行する北部モチエが行き詰まりを見せていた北海岸北部において、モチエ文化をベースに、ワリやカハマルカなどの外来文化の諸要素を新しい解釈によって新しく組み替えながら取り込んだことで、元々の要素の意味を変化させ、文化的革新を起こしたのではないだろうか。そして、ファチョ＝マヤンガ複合を中心にはじまったこのような文化的革新はさらなる発展を遂げ、既存のモチエ人たちをも取り込みながら規模を拡大していき、中期シカン期のバタングランデグループの建設とともに、巨大で多民族的なシカン・シティが誕生したのであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松本剛, 丸子真祥, ガブリエル・ビジェガス, ガブリエラ・デ・ロス・リオス	4. 巻 第24号
2. 論文標題 パレテアダ土器とはなにか 近年の発掘調査および遺物分析の結果から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代アメリカ	6. 最初と最後の頁 51-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 10件／うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Go Matsumoto, Gabriela De Los Rios
2. 発表標題 The Lambayeque political system viewed from the LiDAR map of Sican Archaeological Complex
3. 学会等名 The 89th Annual Meeting of the Society for American Archaeology（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 松本剛, 山本睦, 大谷博則, Gabriela de Los Rios, Gabriel Villegas, Gustavo Zumaran
2. 発表標題 アンデスにおける都市景観の創成メカニズム：シカン遺跡におけるLiDARおよび発掘調査から
3. 学会等名 出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明 第10回全体会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Go Matsumoto
2. 発表標題 The political system of Lambayeque society as viewed from the spatial configuration of Sican Archaeological Complex
3. 学会等名 The Creation of Royalty in “Out of Eurasia” civilizations: Exploring the Mechanism of the Emergence of Transcendent Power（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松本剛
2. 発表標題 シカンの政治体制とその変遷
3. 学会等名 国際研究シンポジウム「古代アメリカ文明における政治体制とその変遷：マヤとアンデスの比較」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本剛, ガブリエラ・デ・ロス・リオス, ジャンポール・ニエベス・コルドバ, ステファニー・ママニ・エスコバル, 大谷博則, ガブリエル・ビジェガス
2. 発表標題 調査報告：PIACL2022
3. 学会等名 古代アメリカ学会 第27回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Go Matsumoto
2. 発表標題 Research on the religion and ritual in the complex societies in the ancient Andes
3. 学会等名 The 4th Chile-Japan Academic Forum: Archaeology Online Session (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Go Matsumoto
2. 発表標題 La organizacion sociopolitica de la sociedad del periodo Sican Medio: Centralizada o descentralizada?
3. 学会等名 Los Sabados Arqueologicos. Museo Nacional de Sican, Ferrenafe, Peru (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本剛
2. 発表標題 ペルー北海岸に栄えたランバイエケ文化の考古学的研究：「これまで」と「これから」
3. 学会等名 第23回山形大学歴史・地理・人類学研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Go Matsumoto, Gabriela De Los Rios, Gabriel Villegas
2. 発表標題 The Mochicas under the Lambayeque rule
3. 学会等名 The 86th Annual Meeting of the Society for American Archaeology（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鶴見英成、大谷博則、松本剛、渡部森哉、山本睦
2. 発表標題 航空古写真による地形と遺構の復元：ペルー北部ヘケテペケ川流域を中心に
3. 学会等名 古代アメリカ学会 第26回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本剛
2. 発表標題 儀礼実践の通時的観察によって明らかになる祖先の記憶の変化
3. 学会等名 古代アメリカ学会 第10回西日本 / 第12回東日本部会合同研究懇談会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 G. Matsumoto, G. De Los Rios, G. Villegas Julca
2. 発表標題 The Lambayeque sociopolitical system viewed from a multivalley perspective
3. 学会等名 The 85th Annual Meeting of the Society for American Archaeology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 関雄二, ペーター・カウリケ, 大貫良夫, 加藤泰建, 松本亮三, 井口欣也, 坂井正人, ダニエル・モラーレス, 松本剛, 山本睦, 渡部森哉, 鶴見英成, 横山玲子, 荘司一步, 金崎由布子, 松本雄一, 芝田幸一郎, 浅見恵里, 土井正樹, 佐藤吉文, 徳江佐和子, 西山徳明	4. 発行年 2024年
2. 出版社 在ペルー日本大使館	5. 総ページ数 192
3. 書名 日本のアンデス調査研究65年の歩み	

1. 著者名 山本睦, 松本雄一, 荘司一步, 鶴見英成, 井口欣也, 関雄二, 鵜澤和宏, 中川渚, 荒田恵, 芝田幸一郎, 坂井正人, 土井正樹, 佐藤吉文, 渡部森哉, 松本剛, 浅見恵理, サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ, 長岡朋人, 瀧上舞, 宮野元太郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 392
3. 書名 アンデス文明ハンドブック	

1. 著者名 Paloma Carcedo de Mufarech, Luisa Vetter Parodi, Carlos G. Elera, Rafael Vega-Centeno Sara-Lafose, Haagen Klaus, Peter Kaulicke, Melody Shimada, Izumi Shimada, Ursei Wagner, Ken-ichi Shinoda, Julie Farnum, Robert Corruccini, Hirokatsu Watanabe, Alan K. Craig, Rafael A. Segura, Go Matsumoto, Kelly Knudson, Mai Takigami	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Museo de Arqueologia, Antropologia e Historia, Universidad Nacional de Trujillo	5. 総ページ数 598
3. 書名 Arqueologia y vida, Peruanistas del Siglo XX, No.2: Izumi Shimada	

1. 著者名 Yuichi Matsumoto, Yuri Cavero Palomino, Jason Nesbitt, Juan Pable Villanueva, Masato Sakai, Yuji Seki, Daniel Morales, Atsushi Yamamoto, Miguel Guzman Juarez, Go Matsumoto, Gabriela De Los Rios Farfan, Jordi Rivera Prince, Marie Noguchi, Gabriel Villegas Julca, Luisa Diaz Arriola, Pedro Espinoza Pajueloほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Universidad Nacional Mayor de San Marcos y Universidad de Yamagata	5. 総ページ数 277
3. 書名 Paisaje y territorio: practicas sociales e interacciones regionales en los andes centrales	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際研究シンポジウム「古代アメリカ文明における政治体制とその変遷：マヤとアンデスの比較」	開催年 2022年～2022年
--------------------------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ペルー	Museo Nacional Sican		